

学習フックシート

道徳科 / 中学校1年  
2021年4月30日付

社会人になってからの朝の慌ただしい日々を  
一服の清涼剤のごとく生け花を楽しく拝見して  
おりました。ご準備は大変だと思いますが、毎月楽し  
みに通勤しています。今後も続けられるかどうかは私の  
知る限りではありませんが、長年のご報志にひとこと感謝  
申し上げたく。  
令和二年十月五日  
上社駅 三十代 男性  
(くまもと原)



佐々木香理記者

私は地下鉄上社駅で生け花のボランティアを約40年させていただいています。駅に一通の手紙が届きました。世の中このような方もおられることに、びっくりと同時に感動しました。もったいなく、思い切って投書します。=名古屋市名東区、内藤弘子さん(84)

# 感謝の手紙を くれたあなたへ

たった一輪でも、花瓶に挿してあるだけで、すがすがしい気持ちになりますよね。名古屋市営地下鉄東山線の駅で生け花を飾るボランティアを続ける84歳の女性が一通の手紙を受け取りました。「43年で初めて」受け取った感謝の手紙。でも、差出人の名前はありませんでした。



市営地下鉄東山線上社駅の構内で花を生ける内藤弘子さん=いずれも名古屋市名東区で

問1 三十代の男性は、どんな気持ちで手紙を書いたのでしょうか。

問2 手紙を受け取った内藤さんは、どんな気持ちで新聞社に投稿したのでしょうか。

問3 佐々木記者は、この二人のやり取りを、なぜ記事にしたのでしょうか。

## 知人の活動を継いで

生け花は中学1年の時に始め、教える免許も二つ持っている。東京都内で服飾学校に通った経験があり、裁縫も得意。社交ダンスも大好きという、背筋のしゃんとしたエネルギッシュな女性だ。

上社駅での生け花ボランティアは、もともと知人が始めたもの。知人の転勤を機に後任を頼まれて以来、43年になる。花材はご近所から分けてもらったり、自宅の庭の草花を使ったり。店舗で購入することも多く、友人がこれまでにかけた費用を計算してくれたことも。

## 亡き夫に背中押され

生け花ボランティアを続けてきたのは、誰かが待っていてい

るような気がするからだ。「通学、通勤の一時のやすらぎになれば」

20年ほど前、夫の入院や建て替えが重なって忙しくなり、辞めようかと悩んだこともある。そんな時に普段から無口だった12歳年上の夫が「駅だけは続けたら」と応援してくれた。

夫はその後、他界。夫の言葉は今でも背中を押してくれる遺言だ。「通勤の時に地下鉄を使っていたから、生け花を見てくれたのかな」。確かめたことはないが、そう信じている。

## 差出人不明の封筒

昨秋ごろ、市交通局を通じて匿名の手紙を受け取った。封筒の表には「生け花を長年上社駅で生けて下さった方へ」とあり、差出人は不明。青色の小花があしらわれ

た一筆箋につづられた感謝とねぎらいの言葉に涙ぐんだ。報われた思いがした。「お父さんの言った通りやって良かったなって」

## 「ぜひ会ってみたい」

手紙は宝物。すらすらとそらんじられるほど。読み返すたびに募る思いがあるという。「ぜひ会ってみたい。どんな仕事をしているのか。ご家族が生け花をやっておられるのか」。聞きたいことはたくさんある。この春、思い切って投書したのを機に手紙の主に「返信、を出すことにした」。